

# 郷土室だより

## 埋もれた文化財 1

安藤 菊二

はじめに

編集者から、中央区の文化財について何か書いてみないかと誘われて、中央区の文化財は誰もが知っているものばかりで新味がない、あまり人の気付いていない文化財が二・三あるから書いてみましょうと安請合いをした。

さて書き初めて、文化財とは何ぞやということが気懸りになってきた。手近にある平凡社の大百科辞典を持ちだしてみると、

文化財とは、人類の文化活動によってつくりだされた事物、事象で文化的価値あるものをいうが（文化財保護法Ⅴ（昭和二五年法律第二一五号）ノ発布以来、同法の対象とするものをさす場合もある。

と説明してある。文化財保護法に説くところは、有形・無形の文化財のほかに、民族資料や、遺跡・記念物までを包含して、すこぶる広範囲にわたっている。従ってたいいの物件・事象は文化財の対照となるわけであるが、文化的価値が有るか無いかの判定になると、素人の手に負えない。これはどうしても、経歴豊かな各分野の専門家の審議決定にまたねばならない。

私が当初取上げてみようと思論んだ物件は、まだ正式に文化財として登録のすんだもので

はなかった。しかし、素人眼にはいかにも素晴らしい文化財として映る。文化財調査委員会が設定されているならば、委員会に調査を依頼すればすむのであろうが、現在、区にはまだ設定されていないらしい。こうした場合、適当な紙面を借りて私見を開陳するよりほかに方法が見当らぬ。そういう意味合いでなら、未承認文化財を紹介するのもむだではあるまい。

この蕪稿が機縁となって、何らかの保護対策が講ぜられ、保存と利用の道が開らけるならば、願ってもないことである。前置きはこれくらいにして、本筋にはいろう。

□その後中央区では、文化財保護条例が63年4月1日に公布され、10月1日より施行されます。この条例により、文化財保護審議会が設置されます。

△その1Ⅴ加茂能人形の山車  
最初に取上げてみたいのは「魚がし会」の所有にかかる「加茂能人形山車」である。

この山車は、旧幕時代に「天下祭」と唱われた、麴町山王日枝神社の祭礼の呼物、山車行列に、魚河岸が出品していた山車の名称である。原物は関東大震災で焼失してしまい、現在あるのは、後述するように、戦後魚がし会が、焼残った模型をもとに、忠実に復原した模造品であるが、昭和三〇年に巨費を投じて製作した豪華なもので、単なる模造品ではない。詳しいことは、再



加茂能人形山車 『水神祭』より

び後に触れるとして、しばらく廻って、この山車の活躍した山王祭礼の景況をしのんでみたい。

江戸時代の中年行事の中で、最も華麗盛大をきわめたのは、日枝神社と神明の祭礼で、元禄元年九月神田明神の祭礼に、神輿練物の城内に入るこゝとが許されてから、天下祭と呼ばれて、逐年盛大に赴いた。わけても日枝神社の祭礼は、参加氏子の数六〇町、祭礼番組として、牛に曳かせて城内を巡行した各町自慢の山車の数は四五番を数えた。

祭礼当日は、行列通過の町は往来止めになって、自由な通行を許されず、脇小路は柵を結んで見物人の雑沓に備え、二階棧敷の見物は禁じられ、諸候からは長柄の鎗や幟を出して警固に当った。山車行列の第一番は大伝馬町の鶏、二番は南伝馬町の猿、三番は麴町一三カ丁・平河町・山元町合同の猿・騎射人形、四番は剣に水車、七番は弁財天、八番春日明神、九番静御前人形、一〇番が魚がし持ちの加茂能人形、等々の四五台。それぞれ山車には花笠を冠り、捕いの祭礼半纏を着、紺股引に草鞋ばきの、町内の世話役がつき添って、祭囃子も賑やかに通り過ぎる。

太鼓・大旗・小旗・拍技・田楽・獅

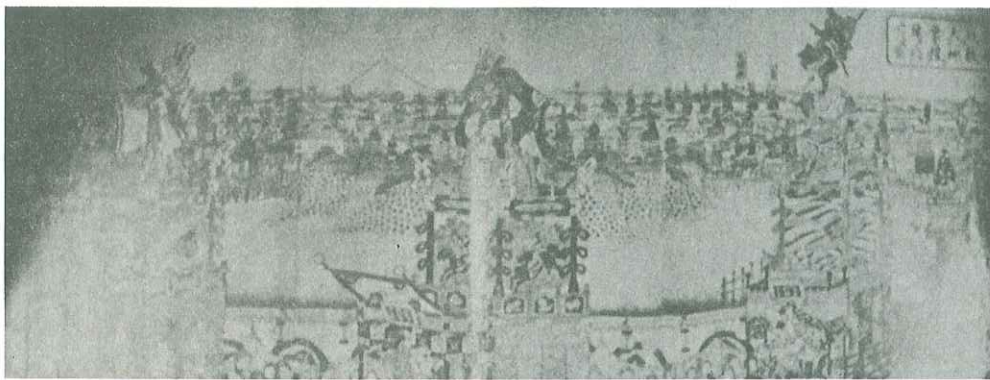
子頭・騎馬の伶人……一の宮の供奉、二の宮の供奉、三の宮の供奉、警固役人の一団などが延々と続く。一の宮の供奉の一行には、赤面の鼻高天狗が交り、三の宮供奉の中には法師武者一〇人が立ち交って人目を引いた。

山車は未明に山下御門に入り、日比谷御門の堀端に添って、桜田御門の前から左の通りを、黒田家屋敷の南、番附坂を登り、山王御社の前から右へ、永田町梨の木坂を下り、お堀端を半蔵門から内廓に入り、竹橋御門を出て、大手前酒井家屋敷、小笠原家敷に添って、常盤橋御門へ出る。ここまで来るに永い日もすでに夕景である。山車練物はここで解散して、各自に退散するが、神輿だけは行列を整え、大伝馬町・堀留・小舟町・小網町、霊岸橋を渡って茅場町薬師のお旅所に到り、それより海賊橋を渡り、通町・尾張町を経り、本社に帰還した。

徳川歴代の将軍は、城内竹橋内において、奥方奥女中衆に囲まれてこれを見物するのが例でもあった。

今から思うと、不思議なほど盛大な祭りであった。祭事を盛大に執行せよとの幕命によるとはいえ、江戸府民は何をおいても祭礼行事に力を傾け、将軍に喜んでもらうことを心掛けた。

天下祭の絵『水神祭』より



出し物の人形に各町競って工夫を凝らした中に、魚河岸では、王朝時代の盛典であった加茂祭りに縁由のある、加茂能人形を扱んで、山車とした。

人形は、能楽加茂の後シテとして登場する、別雷の神（わけいかづちのかみ）の神体を具象化したもので、丈はほぼ等身大である。赤頭に唐冠を戴き、大飛出の画を被る。衣裳は紺地に金丸竜模様（つばね）の狩衣を着、赤地赤欄に稲光雷紋模様の半切（大形の袴）をはき、金の幣を右手に持っている。

人形の立つ鉾山車の上段は、四面に、緋羅紗に加茂の競馬の騎馬人物と、楓を刺繍して、華麗目を奪い、下段の引廻しには、加茂の流水に青金二葉葵を織出して、清純の気をたたよわせる。

葵は、日本二大祭の一つとして、天下に名だたる、京都下加茂に坐す加茂神社の神草であるとともに、徳川将軍家の紋章で、「天下祭」にふさわしい出し物だった。

この山車の初造時期は詳らかでないが、徳川時代の初期にはすでに形をなしていたらしい。幕末文久二年に、名匠三代目原舟月が、大改造を加え、山

車は大正年間まで保存されてきたが、惜しくも関東大震災火災で、もう一台あった魚河岸の弁財天山車とともに焼失してしまったのは、惜しんでも余りある。

不幸中の幸せともいべきは、この加茂能人形山車の模型が焼け残ったことであった。一〇分の一の模型で、三代目原舟月が明治一五年ごろ作ったもので、完全な姿で保存されている。

戦後、平和が立ち戻って、中央卸売市場が創設二〇周年を迎えるに当り、「魚がし会」では、水神様のために、この模型に基づいて、文久二年当時の山車を忠実に復原し、江戸の文化の名残りを再現する計画を樹てた。

製作を担当したのは、山車の枠・木彫・車は行徳の後藤直光氏、幕類衣裳は中野の瀬戸俊作氏、人形と面と付属は川越の磯貝勝之氏である。

山車は三〇年に完成、この年八月二日の水神祭に、晴姿が披露され、その日午前七時一五分から一五分間、NHKによって、放送された。しかし、その頃は今日ほどテレビが普及していなかったから、あまり人々の注意を惹かなかったらしい。

区史編集集中にも、その山車の風聞を聞かず、区史に載せずじまいだったことを、今にして申訳なく思うのだが：

・・・

魚がし会では、この山車の完成を記念し、『水神祭』という豪華本を刊行、山車の由来から、祭典の模様まで、つぶさに記録して後世に遺してくれた。私は今、同書の記述を補綴しつつ、この記事を書いているのである。

写真で観る山車はとほうもなく大きい。昨年（注・46年）久しぶりに飾付をした、その時の仕様書に、御飯屋の高さ六・三メートル、奥行五・四メートル、間口三・六メートルと記録してあるそうである。

ところで、水神様の鎮座する築地の中央卸売市場ときたら、一年中戦場のように、買出しの自動車がゴツタ返していて、山車を曳くことはおろか、お神輿を担ぐことすら容易でない。

だから、せつかく大金を投じて復原した豪壮優美な山車も、数年に一度の水神様の祭礼日のほかは、築地市場内にある三菱倉庫で眠っている。

いかにももったいない話である。歩行者天国も設定された昨今である。たまにはこの山車を銀座街頭に曳いて、江戸っ子の心境気を天下に示し、中央区の観光事業に一役買って出て欲しいものである。

### △その2 V 模型加茂能人形山車

昔は、山王の祭にしろ、神田明神の祭にしろ、祭礼の主役をなしていたのは鉾山車であった。それを知って貰うに格好な一文が、山本笑月氏著『明治世相百話』に載っていた。当時の祭の実況を活写して興味深い。

。。。。。

大江戸の豪華を誇った祭礼の山車も、明治の中期を最後として全く見られなくなった。麴町山王、深川八幡、神田明神、いわゆる江戸の三祭りには、殊に名代の鉾山車もそろって、景気のいいことおびたらしい。

山車の囃子の音、まづ六月の山王祭、評判のさる鶏の山車は、一番が大伝馬町のかんこ鶏、二番が南伝馬町の猿、これは冠装束の人物が猿の面をつけ、金の弊束を肩にした人形、由緒のある名作、そのほか本町の弁財天、駿河町の春日竜神、通町の神功皇后など、皆「法橋何某」と銘打った結構な山車が数十本。

八月の深川祭は山車が一番少なかったが、霊岸島の茶釜の山車が振っていた。茶柄杓のぶっ違いの中央に一丈ばかりの銀色の大茶釜、紅白の吹流しで風流なところが妙。

つぎに、九月の神田祭、これは山王に劣らぬ大祭で、山車や踊屋台がたぐさん出た。名物は九条連雀町の熊坂の山車、松の大木に物見の長籠、目玉がグルグル動くので女子供が恐ろしがる。多町の鐘馗は山車中の王、一丈余の大人形で綿の幕を垂れ、中央の大太鼓を唐子風の男二人が左右から打つ。警固には更紗の唐人服にチャルメラ。四十五人の唐人行列。

然るにこの山車をだすと必ず暴風雨があるというので、滅多に出さなかった。

それを明治一七年九月一五日の大祭に久々でひき出したら、前日から空模様が変わり、夜半から朝へかけて稀有の大暴風雨、深川本所は大出水で、つぶれ家はいたる所、まことに物凄い大荒れで、祭礼は散々の始末。それ以来この鐘馗の山車は出たことがないそうだ。

。。。。。

話を再び加茂能人形山車に戻そう。先に私は「魚がし会」所有の山車は、幸いに焼残った模型の人形をもとに復元したものといった。その模型人形がまた素晴らしい逸品なのである。

山車の模型は高さ約一メートル、幅五〇センチの山車と、これを牽く牛一

頭、牛方二人、山車に乗る囃子人形六体、附添いの人形一五体からなる一団の人形で構成されていて、行列を並べると、優に二メートルになるそう。

附添いの人形はチョンまげ姿の旦那衆で腹掛股引わらじばき、揃いの半纏を着、花笠は紐をのど元で結んで、背に負っている。作者は三代目原舟月。

『魚がし百年』に記すところによると、この山車の製作を舟月に依頼し、蒲鉾屋として知られた「駒作」二代目の小林利三郎という人だった。さる旗本のご落胤とかで、この人が駒作（駒場屋作五郎）の養子となったが、性格がハデ好きで、商売は人任せ、茶屋遊びや神社巡りに目を暮し、なんでも明治三五年・六年ごろから、この山車人形の製作にこりだして、金をつきこみ、完成するまでには一〇年の歳月を要しただろうという。駒作の家は、駒豊こと石井浅次郎氏の長女キミさんが養女となつて継ぎ、駒作亡き跡は、キミさんの実父駒豊が魚問屋を営んでいた。

関東大震災の時、キミさん達は船で日本橋川を下って、九死に一生、命からがら危難を免れたのに、この山車は、搬出を頼まれた店員が、どこをどうやって逃げたのか、火難をのがれて無事に戻ってきた。そして又今度の戦時中

は、室町の町会長富仙一佐久間仙太郎氏の手で疎開されて幸いに焼残った。聞くところによると、牛の模型だけが疎開荷物の箱に入らず、牛だけは手許において空襲の間中、富仙さんが抱いて逃げ廻っていたそうである。

この山車の人形群は、今では立派なケースに入れられて、富仙さんの家に保管されている。

△その3▽住吉神社の彫刻など

大正一二年の関東大震災火災によって古い時代の遺物いっさいを失った中央区の中であつて、震災の厄をのがれた佃島の、住吉神社にだけは、若干古いものが残っている。

その佃島にしても、たびたびの江戸の大火に類焼を重ね、幕末には、弘化三丙午年（一八四六）正月一日と、慶応三丁卯年（一八六六）一月九日の、江戸大火の飛火で類焼して、平素準備の小舟に乗せて、搬出した非常持出しの品物のほかは、文書も記録もあらかた失なわれてしまった。それゆえ、佃島の建築物は古いといつても、明治元年を遡りえないし、再建当時の民家は、平家建の零細漁民のバラックが主だったに違いない。総二階の町家

になるのは、なおずっと後年のことになるはずである。

ただ、住吉神社だけは、慶応三年に焼けて翌々年、明治二年（一八六九）に再建されたものであることは、同社所蔵の「水舎御届書の控」（『佃島の今昔』所引に

住吉大神社去卯年十一月中類焼仕候  
処、作事御聞済に相成候。右之内に  
先規之通水屋取建仕候間、為念御届  
奉申上候

明治二己年四月

古跡十一社廻達頭

並住吉大神社神主 平岡日向守

と記されているのによって、明らかにされる。神社境内にあるお水舎も、明治二年の建造であることは、この文書によって疑いの余地はない。

取立てて記すほどのこともなさそうなお水舎の建築年代を問題にするのは、このお水舎の欄間の四周、表裏に稚拙ながら、興味深い透し彫りの彫刻があるからで、私はこの彫刻をも、神社表門の扉に彫られた。「圓月に髪鷲（神社の替紋）」の彫刻と共に、区

の文化財の一つに教えあげたい。

彫刻の図柄は、漁村時代の佃島の生活に取材したもので

①北側表「順風満帆」とでも題するか。

帆にいったい風をはらんで、海原を帆走する二艘の廻船を透し彫りにする。遠景に、白帆三つ四つ。横雲を彫る。

②東側表「佃の渡し」。

ほとんど、地元の人達専用の渡船だったから、乗合わせた男女四人の姿態もなごやかで、鉢巻をした漁師は舟床に座りこんで、手真似をしながら、何やら船頭と話しこんでいる様子。人物の間に遠く石川島の燈台が彫つてある。



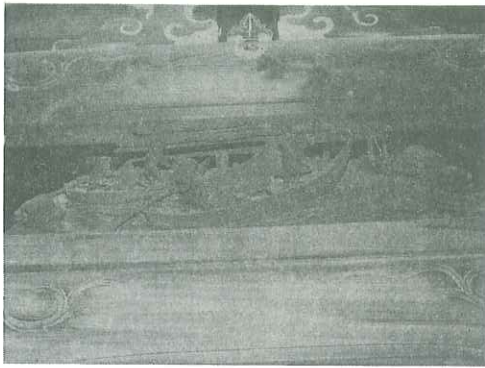
お水舎欄間「佃の渡し」

⑧南側表Ⅱ「投網」。

漕ぎ連れて沖へ出る二艘の狐船。それぞれ舟に、鰻頭笠、腰巻の漁師が一人ずつ乗込んで、一人はろを漕ぎ、一人は投網を手許でさばいている。

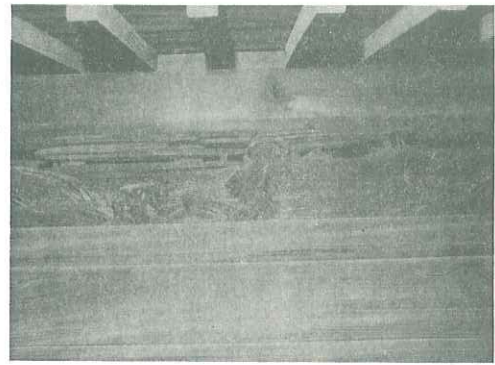
④西側表Ⅱ「磯遊び」。

姉さん冠りの女性が、腰を心持捻って、右手をかざし、踊るような姿勢に見えるのは波によろけたのであるか。左方に、両腕をたくしあげた男性が、かがんで掴んだ大きな魚を持ち、傍らの女性にはほほ笑みかけている。右方に波に飛ぶ千鳥が三羽、彫り添えてある。



「投網」

「磯遊び」



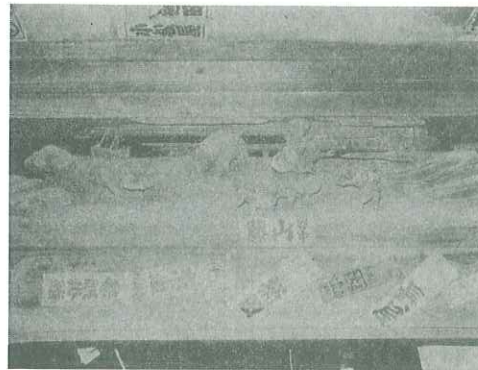
⑤西側裏Ⅱ「汐干狩」。

「磯遊び」の裏側に彫ってある。引潮の浜辺に貝を掘る夫婦と子供三人がいる。姉さん冠り。女性の持つ手提げ籠に、大きな貝が山盛りに入っているのは、蛤なのであろう。

お水舎の欄間彫刻の絵様はだいたいかくのごとくである。

それのみでなく、屋根を支える雁股をうけて、棟木の四方には、跳躍する獅子の上半身が彫っており、作者の気魄の籠った彫刀の冴えが見事である。前に引いた記録に、先規の通りに建てたとあるから、焼失前のお水舎に

存した彫刻を、下絵にでもよって模刻したのであろうか。それにしても、彫刻した工匠の名の知れぬのを惜しいと思う。



「汐干狩」  
「獅子」



•••

現在、住吉神社の拝殿には二面の奉納額が掲げられている。一面は、尾形月耕筆になる蘭陵王の舞。一面は、柴田是真筆、水辺芦鷺図。佐原六郎教授のご調査では、前者の大きさは〇・八二メートル×〇・五六メートル。後者は〇・八九メートル×一・一六メートルで、是真の納額はかなり大きい。

ともに金箔を置いた桐板を素材にし月耕の納額は、雲冠を頂き、赤装束をつけて、竜神の面をかぶって舞う。雅楽の蘭陵王を背面から描き、是真納額は、芦の自生する水辺に、群れ集う六羽の鷺を描く。

お水舎欄間の跳躍獅子も、是真筆芦鷺図も、かつて故平岡好文翁が住吉神社記念絵葉書を調製する時、扱んでその内に加えられ、人々の注意をうながすところがあった。

•••

住吉神社の所蔵品の中で、なお一点注目すべきは、賀茂季鷹撰文になる、川上伊兵衛彰徳碑の拓本であろう。

言うまでもないことながら、陸上交通機関の発達しなかった江戸時代には

関西地方からもたらされる大量の物資は、ことごとく廻船によって江戸へ輸送されていたから、滄海をしのぎ危難を犯してくる廻船の船頭、水夫はもとより、出荷、荷請の諸問屋も、神仏の加護を祈る心は、今日では想像もつかぬほど強かった。航海神を奉祀する住吉神社に対し、諸問屋が篤い崇敬の念を寄せたのは、このためである。

江戸・大坂間の廻船業は、元和五年（一六一九）、堺の商人によって開始されたと伝えられるが、江戸大坂間の海運の盛行に伴って、難破船の数も少くなかった。海運協定も結ばれてはいたものの、年経るにつれて廻船業者による、積荷の抜取り、故意による海難事故が多発して、江戸の荷積問屋の蒙る損失は莫大な額に上るようになった。

この不合理を打破するために立上ったのが、日本橋通町組仲間の商人川上正吉川上正吉、大坂屋伊兵衛であった。

彼は元禄六年（一六九三）に、大坂からの下りの荷物を取扱う、江戸の諸問屋に呼びかけて「十組組合菱垣廻船積仲間組合」を結成し、難波荷物の処理方法を定め、共同海損の分散勘定は、十組行司が掌握し、船手に関する一切を支配するという、強力な機構を確立した。

江戸の十組問屋が隆盛に赴くをえた

のは、一にこの組合結成のお蔭であったから、十組問屋では、寛政三年（一七九一）に海上安全の祈願と、十組問屋の繁栄を感謝し、川上正吉の功績を後世に伝えるために、一大彰徳碑を住吉神社の境内に建立したのであった。碑文を撰じたのは、京都加茂神社の「祠宮で、歌人として聞えた賀茂季鷹であった。三百数十字におよぶ碑文は、

「つが木のいやつが継々に語り継いひつぎゆかむいさをしぞこれ」という和歌をもって結ばれている。

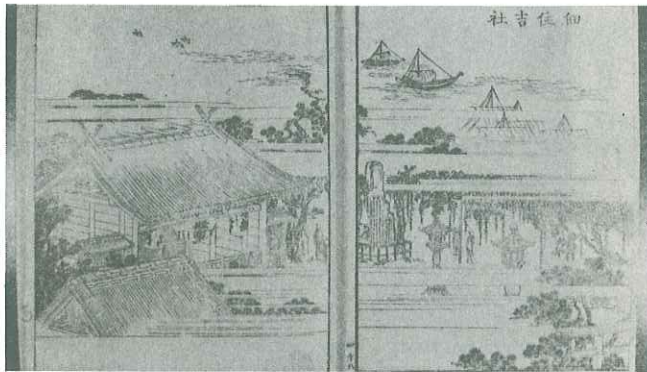
建碑後間もない、寛政十年ごろ、葛屋重三郎の店から出版される予定の、浅草庵市人撰の狂歌絵本『東遊』に載せる挿絵を描くために、葛飾北斎は佃島へ往って、住吉神社の境内を写生して帰った。名物の藤がまだ咲き残っている頃だったらしい。

挿絵に載せたその「佃住吉社」図には、社前右手に、丈の高い一基の石碑が描かれている。それがたぶんこの川上正吉の彰徳碑と認められる。

原碑はいつの日かの火災に焼けて亡んでしまったが、幸いに住吉神社にはその碑の拓本が珍藏されていて、碑のたたずまいを偲ぶことのできるのには、幸いといわねばならぬ。拓本の写真は『京橋区史』上巻にも載せて、著名なものゆえ、碑文をここに写すことは避

けるが、原碑の亡んだ今日、この拓本は、江戸十組問屋の栄光を記念する貴重な遺品となった。

この拓本は、先年区史編集記念展覧会に出品して頂いたことがあって、私の記憶は生々しい印象を遺しているが幅は四尺に近く、高さは丈余におよび、壁面に懸けることができなくて、ホール中央の机の上に、展示したと覚えている。



『東遊』より 佃、住吉社

△その4 V 正月行事、九鬼の札切

この項は、郷土室だより第42号に載せたことがあるものですが、今回「埋もれた文化財」としてまとめるという意味で再録しました。

九鬼というのは、デーモンではなくて、江戸時代に北八丁堀に上屋敷を構えていた、丹波国綾部一万九千五百石の領主、九鬼式部少輔家のことを指す。この九鬼家では、いつの頃からか、毎年堅固な門松を立て、それに呪文を書いた札を正月七日の間、次第に大きなものを取り替えて釣り下げるしきたりであった。その札を手に入れると、その年は運がよいと称して、近隣に住む若者達は、日々閉門を待ちかねるようにして、いっせいに争奪戦を演じた。全国的に見てもちょっと比類を見ないこの正月行事を「九鬼の札切」といっていたのである。

明治維新後、九鬼家は退転して八丁堀を引払い、行事は自然消滅し、大正初年の頃には、その行事を知る人も甚だ稀になった。雑誌『江戸』を編集しておられた、江戸旧時采訪会幹事平山成信氏がこれを嘆いて、八丁堀与力出身の文化人今泉也軒翁にこのことを質ねたところ、也軒翁から詳しい返信が届いた。この書信が、雑誌『江戸』の

第三卷第二号に載つたのは大正五年三月のことで、その行事を知る人のいなくなつた今日、記録を重んずる意味でその書信をここに転載しておこう。

御尋之九鬼の札切と申候へ、九鬼家上屋敷(現今日本橋区坂本町四拾番地坂本公園消防分署紅葉女子小学校之地)に、正月元日より七日迄ニ行はれし事ニ御座候。小生の生地現今北島町老目老番地、町奉行組屋敷の一角にて出生候事故、日々見物ニ参り申候。

九鬼家の表門ハ新場橋の川に面し大原大明神の社地ニ向ひてありし。旧幕時代の大名の松飾は、いづれも間口大きく立派の事に候ひしが、九鬼家の松飾ハ、殊に堅固ニ作られたり。大体筋の柱ハ八寸角位の荒木にて作られ、其上ニ松竹注連をつけ、海老櫓常の如く筋られ、注連の中央に札を下げられ、其札ハ、表は何やら記憶ニハ無之候へども、裏ハ



とありしと覚ゆ。

此札を、元日ニハ老尺五寸ニ、中三寸位と見ゆ。日々漸々大キクなりて、七日の札ハ式尺位ニ巾ハ四五寸と見ゆ。此上端に穴をあげ、麻繩ニて注連の中へ隠るる程につるすなり。

其繩も日々太くなりて、元日ニハ六枚糸位にて、七日ニハ細引位のを用らるる。

而して、日々左右に筋手桶に水を張り、三箇ツツつみてあり、其脇ニ足輕の者なるべし。六尺棒を杖きて立番をして居るなり。

夕七ツ時(今の午後四時)になれば、左右の手桶の水を捨て、門内へ取込み、棒突ハ門内ニ入り、中央大門を閉る也。

札をきらんとする者ハ、各友人を頼みて、多きハ五十人位、少なきも三十人位、各静肅に待ちて居る。此団体三組も四組もあり、大門のしまるを合図に注連の下にかけ行きて、札へ飛付くなり。

各の党派の者ハ、他の党派をよせつけじと争ひつゝあり。地上から注連迄ハ八九尺位あれば、飛付くに中々骨を折る事なり。兎角して飛付けば、其者の友人大勢取り付きてぐるぐるまはる也。飛付し者ハ一生懸命

に札にかちりつきあるを、下にたかづぎて廻る故に、暫くすれば繩をねぢ切る也。此間も他の党派より邪魔をするを、老部ハかつぎて廻り、一部の者ハ他の者よせつけじと防禦す。其騒中々喧しき事也。

終にねぢ切れれば、此切りし者を胴上ケにして、其辺五六丁の間をヨッショイ／＼とかけ声し、手を打ち大声をあげて祝しつゝ巡る也。其切りし者もかつぐ者も、正月小袖の新しきを破綻るにま構はず、騒ぎまはる也。こを誇りとする也。日々此の如し。

此切る者ハ多くハ新場河岸の魚屋より出る也。他の町よりも出るなれども、新場には常に閑静を心掛る者も多く、馴たれば、大体新場へとらるる也。

一ト年角力の連中取に來て、是にハ終にとられたり。然れども、新場にも角力を最負にする者もある故、其愛顧を失はんを恐れ、重立ちたる者より、角力の札切に出るを禁じたりときけり。

此札を切りし家ハ、持船或ハ神棚にかざり、其年ハ運よろしとて、友人をあつめ、酒宴を催す事なり。何故か此札を切りし者の家にてハ、切りたる年の老ケ年の間鮭を喰はず。

先ハ荒増右の通に御座候。

文章が候文で、少しく読みづらいつて思うが、行事の模様は紙上に躍如として見るがごとく、百余年前には、区内にもこうした田園的で郷土色豊かな行事が行なわれていたことに、驚く人が多いと思う。

也軒翁はなおこの書簡の後に附記して、世間に伝えるところでは、九鬼家では大晦日の夜、鬼と藩主とが酒宴をして、藩主には氷砂糖の吸物を出し、鬼には燧石(火打石)の吸物を出して、たがいに問答があり、結局鬼が負けて、この札を七枚書くところだと記し、先年九鬼家の人に問うてみたが、詳しいことは分らなかつたといっておられる。

氷砂糖がわが国に伝わったのはそう古いことではないと思われるが、その点がすり変えられているとしたら、鬼が貴人に賭を申し入れ、おもわくに反して敗をとり、代物を提出するというモチーフは、すでに紀長谷雄隻紙絵巻に見えている。そうした古代貴種の家に伝わる伝承を九鬼家が伝え、年中行事として伝承していたのは珍重に価値する。

しかもそれが、江戸屋敷で行なわれ、江戸の正月行事の名物の一つとな

っていたこともはなはだ興味深いこと  
といわねばならない。

以上を書き終って、四壁庵茂鶴の『  
忘れ残り』に、「大名の門筋」につい  
て記してあったのを思い出した。書庫  
へ入って『続燕石十種』を持ち出して  
検討したら、九鬼家の松飾についても記  
すところがあり、也軒翁の記事を補足  
する部分もあるので、煩をいとわず更  
に引いておくこととする。

正月松の内、八町堀九鬼長門守殿  
の表の松筋に、蘇武将来子孫家と書  
し札をかける。申の刻に至りて門  
のしまるを待ち、魔除けなりとて彼  
の札を取らんと集る者数百人なれど  
も、只一枚の札なれば甚得がたし。  
漸々にして取れども人に奪はれ、其  
うばひしものもまた人に奪はる。其  
の混雑する事甚し。能く取り得るも  
のは、戦場に一番の印を上るよりも  
難し。佐竹家には松を立てず、門の  
左右に人を多くならべ置き、これを  
佐竹の人筋といふ。鍋島家は松かさ  
りのうへに、藁にて鼓の胴をつくり  
て飾る。甚見事のものなり。  
南部は橙野老神馬藻昆布に添へ  
て、塩鯛の大なるをふたつならべて  
飾る。

と、江戸の諸藩邸の門松にそれぞれ特  
色の存したことを記していた。

四壁庵の記でごくであるならば、  
九鬼家の門松に下げる木札の表には、  
朝鮮風の魔除けの言葉が書かれていた  
ことになる。それとわが国の陰陽道の  
呪文とを表裏に認めたその木札は、幸  
運をもたらすためのまじいではなく  
して、本来的には魔除けのまじい札  
だったのかも知れない。

四壁庵の記事の末段には、もう一か  
条「馬喰町にかぎり、戸毎に竹ばかり  
を立て、注連を引きわたし、松は用ひ  
ず。」という、聞き捨てにできない記事  
が附してある。

馬喰町の旅籠屋街が、なぜ竹ばかり  
を立てて松を立てなかつたのか、おそ  
らく何か言い伝えがあつたのであろ  
う。古老の間に伝えるところがあるな  
らば、御教示をえたいものである。

郷土室よりお知らせ

○本稿「埋もれた文化財」は、安藤菊  
二氏が、中央区役所の庁内報「ちゅう  
おう」に、昭和47年から48年にかけて  
連載した記事に手を加えたものです。  
その1 加茂能人形の山車  
（47年7月1日号）  
その2 模型加茂能人形山車  
（47年9月1日号）

その3 住吉神社の彫刻など  
（47年11月1日号）

その4 正月行事、九鬼の札切  
（48年1月1日号）  
発表当時から十数年の月日が流れ、  
文化財をめぐる状況にも多少の変化が  
みられるようです。

当中央区でも、——中央区の区域内  
にある文化財について、区民と行政が  
一体となってその保存と活用を図り、  
郷土文化の振興と発展に努めていく  
——という趣旨で、中央区文化財保  
護条例を制定。当条例は、63年4月1  
日公布、10月1日施行ということで、  
準備がすすめられています。

○次の号では、「埋もれた文化財」そ  
の5、その6」続いて「埋もれた記録  
」を御紹介していきたいと思ひます。

○本稿を執筆された安藤菊二氏は、京  
橋図書館職員、続いて京橋図書館調査  
員として、通算二十数年にわたり、  
貢献されてきました。その間「中央区  
史」をはじめ、「中央区三十年史」「  
中央区の文化財」「中央区年表」の編  
纂、そして「郷土室だより」への寄稿  
と、活躍されてきましたが、この度健  
康上の理由から、63年3月をもって勇  
退されることになりました。  
○現在「中央区年表」の編纂には、宮  
川英夫、鈴木理生の両氏があたってお

られます。なお「中央区年表」は、今  
後、昭和時代篇Ⅷ、Ⅸと、刊行してい  
く予定であります。

○東京を語る会のお知らせ

今回は、築地ホテル館々 に関して、  
大鹿武先生にお話を願えることになり  
ました。先生は、昨年、『幕末・明治の  
ホテルと旅券』というご本を出版され  
ました。築地ホテル館は、多くの錦絵  
に描かれており、また、わが国初の洋式  
ホテルということで、興味をお持ちの  
方も多いと思ひます。開催日が決まり  
ましたら、別途お知らせいたします。



築地ホテル館復原図